

山田太一

早春スケッチブック



早春スケッチブック

一九八三年三月一五日 第一刷発行
一九八五年三月二〇日 第七刷発行

著 者 山田太一

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三―四

郵便番号 一一二

電話 (〇三三) 四五一一

振替 東京六六四二二七

印刷所 信毎書籍印刷

製本所 ナシヨナル製本

装 画 石田光於

装 幀 高麗隆彦

©1983 T. YAMADA Printed in Japan
0395-54091-4406

乱丁本・落丁本はお取替します

書房

出田太一

早春スケッチブック



早春
スケッチ
ブック

●相鉄線沿線（昼）

鋭い電車の警笛。下り急行電車から見た天王町駅前のスカイビル第一第二第三と続くアパート群、見る見る角度をかえて行く。この短いが不安定で不吉な印象に続き、相鉄線下り電車が激しく接近して来る。そして目前を通過途中の横位置でストップモーション。

と、ここまでは不穏な印象あって、さわやかで甘いタイトル音楽と共に、メイン・タイトル。

走る電車。沿線の平和な風景にクレジット・タイトルのその間に、白黒写真が幾度かインサートされる。その写真は、平和な昼の郊外電車沿線とは似合わない刺青の裸体の男、ピンクサロンの男女、血だらけの喧嘩の男などである。それらにはタイトルはのらない。

クレジット・タイトルのバックは、電車をはなれ、登校する女子高生、男子高生、テニスをする人々、スパー風景、幼稚園バス、下校する小学生など、希望ヶ

丘、二俣川あたりの平和で幸福な印象の生活描写のモンタージュ。
そして、希望ヶ丘駅へ電車すべりこんで来て、クレジット・タイトル終る。

●高校（午後）

下校時のスケッチ。グラウンドで部活のラグビーをはじめている生徒たち。吠えるような声は、体育館のテラスで応援練習をはじめた男子生徒たちである。男女、大勢の生徒が、正門への坂道を帰って行く。十二月である。

●高校・自転車置場

自転車をはき出す生徒たち。その中に望月和彦がいる。大沢「（ややはなれた自転車へ来ながら）望月よ」
和彦「（声をかけられなくて、自転車の向きをかえながら）うん？」

大沢「明日お前代々木行くだろ？」

和彦「なによ？」

大沢「俺も申し込んでんだ。一緒に行かねえか」

和彦「（自転車にひらりとまたがりながら）分んねえよ、俺（と逃げるように走らせる）」

大沢「分んねえって——申し込んでんだろ、テスト（と人

が好くその背に大声でいう」

●高校・門への坂道

和彦、自転車で、下校する男女を追いついておりて行く。

●校門

和彦、自転車を出て来て、一方へ走って行く。

●住宅地への道

和彦、自転車で行く。

●住宅地の坂道

下から自転車で頑張って上って来る和彦。そのあたりも、土曜日のせいで、下校する小学生数人や、中学生らしき子などが、歩いていて。和彦が荒い息で、のぼりきった時、

良子の声「お兄ちゃん！」

和彦「（その方を見る）」

良子、電柱につかまって、他校の生徒らしい女子中学生五人にとりかこまれている。二人はどが、良子を電柱からひきはなそうとしている。

良子「（電柱につかまっていって）お兄ちゃん、助けて！」

忽ち五人の女子中学生の中の多恵子が和彦に迫力をもつて向って来て、

多恵子「なんだよ、文句あんのかよ？」

和彦「（数秒のことで、なんの事か分らず）文句って——」

多恵子「（和彦の胸のあたりを容赦なく突き）行けよ、行くんだよッ」

良子「お兄ちゃん（と他の三人ほどに電柱からひきはがされてひっぱられて行く）」

和彦「（怖くなるが、ほっておけず）なによ、一体？（とちょっとへつらうような笑いが出てしまう）」

行子「（多恵子の援護に来ていて、その和彦を横からつきとばし）なによとはなんだよ！」

●人通りのない道

高い塀に沿った住宅のない道。五人の女子中学生が、塀を背にして立つ和彦と良子をとりかこんで「ほらよ、さっさとしないかよ！」「ほれほれ」「頭下げんだよ」などと声をあげている。和彦の自転車は倒れている。

和彦「（心を決め）すいませんでした（と「礼）」

良子「（顔をそむけるようにして動かない）」

多恵子「なにがすまねえんだよ？」

和彦「だから、こいつが、えらそうに」

良子「（その和彦へ）ただ歩いてただけよ」

行子「(その良子の髪の毛をつかみ) 笑ったろうが」

良子「痛いッ(と行子に激しく抵抗し、扉に添ってちよつと走る)」

五人、バラバラッとその良子の行手をさえぎってかこむ。

良子「お兄ちゃん、やろう! あやまることないよ! やつつけちゃおう!」

多恵子「(このアマという感情が高まる)」

和彦「(その良子の前へ素早く立ち) 俺があやまったじゃねえか」

行子「本人がなんであやまんねえんだよ!」

良子「なにもしてないもん!」

和彦「黙ってる、バカ(と良子に怒鳴り多恵子に) あやまらせるよ。金も渡したし、いいじゃねえか」

多恵子「二千五百円で(せせら笑う)」

和彦「それっかねえもん。家へ帰ったってねえし、月末で仕様がねえよ」

行子「なんだよ、その口は!」

和彦「金持ってるのは、他にいるだろ。俺ンちなんか安月給で、二人とも金なんかねえよ!」

行子「だったら時計はずして行きな。二人とも腕時計はずすんだよ!」

多恵子「(行子へ) ちょっと黙んなよッ(と怒鳴り、和彦を

見て) 古時計とったって、仕様がないう。こういうのは、追いつめると、サツへたれこんだりするからよ」

和彦「そんなことはしないよ」

多恵子「あやまんな。兄妹して、地べたに手についてあやまんな」

和彦「いいよ」

良子「あやまんないわ」

和彦「(すかさず) あやまらせるよ(と多恵子たちを制するようにいい) その代り、こいつのことは忘れてくれよ」

多恵子「条件つけんのかよ!」

和彦「分ったよ(良子へ) いいから俺のいう通りするんだ」

良子「やつちやおうよ、二人なら、やれるわよ(と目をそむけたままいろ)」

和彦「いいから、いうこときくん(とその腕を掴んでゆする)」

多恵子「(その和彦を見ている)」

和彦「座れ」

良子「いや」

和彦「座るんだ」

良子「絶対いや」

和彦「いう通りするんだ(と頭を叩く)」

良子「(口惜しくて泣き出す)」

和彦「(多恵子を見て) 俺だけで、勘弁しろよ」

多恵子「——(その和彦を見ている)」

和彦「(膝をつき) すいませんでした(一礼)」

行子「フン(どうするかな、とボスの多恵子を見る)」

多恵子「(和彦を見下ろして、その和彦の肩を蹴る)」

和彦「(ちよっとのけぞる)」

多恵子たちの笑い声、次のシーンへ。

●住宅地の道

ぐいぐい歩く良子。自転車で和彦や後ろからついて、

和彦「おい、乗れよ、後ろへ」

良子「(ぐいぐい歩く)」

和彦「おい」

良子「(バツと立ち止り) さっさと行つてよ。お兄ちゃん

なんか大嫌いよ(とぐいぐい歩く)」

和彦「(自転車走らせ、追いぬきながら) 勝手にしろ！」

良子「意気地なしッ！」

●望月家に近い道

和彦、自転車をとばす。

●望月家・表

二階二間は和彦と良子の部屋。階下に和室があり、そこが夫婦の部屋。他に居間、ダイニングキッチン、風呂場という一戸建て。カーポートのある玄関。いまは車はない。

和彦、スピードを出したまま、ドドンとカーポートへすべり込み、つきあたりのブロックに自転車をぶつけて降り、憤懣のやり場がなく、自転車にあたって、口惜しがる。

都「(勝手口から顔を出し) なにしてるの、こわれちゃうでしょ！」

●ダイニングキッチン

野菜をいためている都。

食卓の前に腰かけて、両手で顔をおおっている良子。

都、ガスを止め、フライパンを持って食卓にあらかじめ置いてある皿へ野菜、いためを盛る。

良子「(バツと手をとる) どう思うの? お母さんは、どっちが正しいと思う?」

都「一口にはいえないけど——」

和彦「(居間のソファにころがっていたのが起き上り) 見えると思うね、俺は」

良子「お兄ちゃんは高校三年よ。向うは、中学の女よ」

和彦「五人だろ。カミソリ持つてるかもしれないんだぞ」

良子「ヘエコラしちゃって。地べたに手をついちゃって」

和彦「お前は、ずるいんだよ」

良子「何処がずるいのよ？」

和彦「俺がいたから、つっぱってられたんだろ。俺が間へ入ると思って、いい調子で、恰好つけやがって」

良子「一人だって、同じよ」

和彦「同じなもんか。助けてエ、なんていってたくせに——」

都「もうやめて。うるさい」

良子「(口の中で) なによ(お兄ちゃんなんか)」

都「お母さんもう五十分だもの、行かなきゃならないから。二人で、喧嘩しないで食べるの(といいながらも、パートへ行く仕度で、身体を動かし続けながら) 食べたもん自分で洗うのよ。それから(ひき出しから封筒に入ったお金を出して和彦の前のテーブルへ置き) 夕方、保険の人が来るからこれ払つて。良子は四時すぎたら洗濯物を取りこんでおいて(と玄関へ)」

良子「どっちが正しいと思うの? お母さんは」

●玄関

都「そんなこといまいってる暇ないでしょ(と靴をはく)」

●居間とダイニングキッチン

良子「分ってるわよ。お兄ちゃんが正しいのよ。そっちは本当の親子だもんね」

●玄関

都「(ハッとして) 良子」

●居間とダイニングキッチン

和彦「バカ。なにいうんだ」

良子「分ってるわよッ(とバツと階段の方へ)」

和彦「おい！」

●玄関と階段

良子「(都を見ないようにして、駆け上って行く)」

都「良子！」

ボタンと二階のドアが閉まる音。

和彦「(居間から追うように出て来て) 下んねえこというなッ(と二階へいう)」

都「いいわ。喧嘩しないで。お母さんいま時間ないから」

和彦「あんなこと、いったことなかったのに」

都「大げさにしないで。夜、いうから」

都「——(下駄箱の上の手提げをとって、出て行く)」

●希望ヶ丘駅前商店街

「歳末大売り出し」の看板や旗。シングルベルが流れている。

●花屋

シクラメンなどの鉢が店先にあふれ、正月用の松なども売っている。

都「(その松を二本とって客に見せ) こんな感じで如何ですか? (と門の両側に打ちつけるのに、バランスのいい枝振りを示す)」

女客「いいんじゃないかな?」

別の女客「すいません、このシクラメン (と鉢を持ってさし出す)」

都「はい。ちょっとお待ち下さい」

●望月家・表(夜)

カーポートへ車入って来て、止まり、ライト消える。エンジン切る省一。ドアをあけ、外へ出る。玄関のドアがあき、

都「笑顔なく、小さく」お帰りなさい」

省一「おう(と車のドアを閉める)」

●和室

背広上下は脱いでいて、ワイシャツとステテコで、ネクタイをとり洋服筆箱のネクタイかけにかけながら、省一「(疲れているのに情けなく) そんなこと、こんな時期にまいるな。年末っていうのは、信用金庫が一番忙しいんだぞ。一番疲れてんだよ、こっちは(と都に当りたくはないが、やや腹立たしくなりながら出て行く。行きながら、ワイシャツを脱ぐ)」

都「(続きながら) だけど、私だけでいったんじゃ、こじれるでしょ?」

●居間

省一「(風呂場の方へ行きながら) 十一時だぞ、もう」都「分ってるけど、お父さん明日前橋でしょう?」

●風呂場と洗面所

省一「行きたかないよ。日曜に行きたかないけど、本田さんが店たんで帰るっていうんだ。手伝わないわけにはいかないだろ」

都「和彦も朝から日曜テストだっていうし、ちょっとでいいから今晚なんかいいって」

省一「(裸になって風呂場へ入って行く)」

都「お汁粉つくつたの。みんなで食べながら。——ね」
省一「（風呂の中の湯を桶でかき回す）」

●ダイニングキッチン

四人がテーブルに向って、お汁粉を前にしている。都は、お茶をいれている。

省一「（食べて）もう——随分、そういうこといわなかったじゃないか（良子へ）いうなよ、そんなこと」

良子「（黙ってお汁粉食べる）」

都「考える時期なのかもしれないけど」

省一「考えるのはいいよ。事実だもの仕様がないう」

和彦「——（汁粉を食べている）」

省一「確かに、良子が二歳の時に、お父さんは、お母さんと再婚した。お母さんは、小学校二年の和彦と一緒に来た。それから、お前らは兄妹になった。血はつながってない。しかし、二歳からだもん、兄妹と同じだよ。お母さんだって良子を勿論娘だと思ってる。俺だって和彦を、本当の息子だと思ってる。怒ったし、殴ったし、普通の親子とかわんないよ。それでも和彦が中学二年の時、ひがんだことをいい出した。その時、もめたる。それで、もう本当の親とかなんとか、そういうことというのはよそうっていったはずじゃないか。そりゃ、良子はまだ三年生だったけど、ずっといわなかったし、分つてると思っ

てたよ。急にいうなよ。そんなことで揉めるのはかなわないよ。みんな、ちゃんと、うまく行ってるじゃないか」

良子「——」

省一「そうじゃないかよ？」

良子「（悪いと思ってるが、ふくれた顔で）じゃ、どっちが正しいと思う？」

省一「なにが？」

良子「お母さんから聞いたでしょ」

省一「そんなもん、和彦が正しいに決ってるよ」

良子「いうと思った」

省一「いうと思ったじゃないよ。そんなこと関係ないよ。

あやまりゃあいいんだよ、そんなもん」

良子「悪くないのに？」

省一「そうだよ。向うは因縁つけてるんだ。そんなのまともにも相手にして、どうするんだ？ バカ相手にすりゃあバカになっちゃうんだ。二人で、やつつけてみろよ。すぐ向うは仕返しを考えるだろ。そうなりゃ泥沼だよ。金でもなんでもやって。土下座でもなんでもして。そんなの相手にしないのが利巧つてもんだよ。大体和彦は、年明けりゃあ受験じゃないか。そんな時、怪我でもしたら、どうすんだ？ あやまった和彦が正しいに決ってるよ」

良子「——」

都「こういうこというと、良子、気をつかつてるなんて思
うかもしれないけど」

省「そんな事思ったら、バカだ」

良子「——」

都「お母さんもね、頭では、和彦の方が正しいと思うんだ
けど」

省「そりゃそうだよ」

都「でも、私が良子だったら、やっぱり、やっちゃうな」
和彦「だって、そんなことしたら」

省「「そうさ。やったら、あとひいて大変だよ。やつら、
なにすっか分らないんだから」

都「それでも、やっちゃうと思うの。あやまんなかったと
思う」

省「「そんなのは子供だよ。和彦が正しいよ」

都「でも、良子の気持の方が（と）一気について省一の口を
封じ」お母さんは、ずーっと分るな」

和彦「——」

良子「——」

都「フフ、良子と似てるのよ、私」

良子「——」

和彦「——」

省「「苦笑し」見ろ。なんだか、ギョチなくなっちゃっ
たじゃないか」

都「ほんと（と薄く苦笑）」

良子「「情けないような苦笑」」

和彦「——（真顔）」

省「「いいか。二度と、そういうことはないな。この件は、
これで終りだ。俺たちは、立派に、ちゃんと、親子四人
家族だ（良子へ）いいな？」

良子「——」

省「「いいな？」

良子「「うなづく」」

省「「汁粉を食べる」」

都「「食べる」」

和彦「「食べる」」

良子「「食べる」」

●玄関のドア・表

ドアに、クリスマスと正月兼用のプラスチック製の飾
りがつけられていて、それが木枯しにゆれている。

●灯りの漏れる望月家・外観

●代々木・予備校（朝）

日曜テストのはじまる寸前で、混雑している校内のス
ケッチ。

大沢の声「じゃお前、私立受けないのかよ？」

●試験場

その隅にかけている和彦のところに、大沢来ていて、通路にしゃがんで、迷惑そうな和彦に話しかけている。周囲は、ほとんどもう座っていて、数人が入って来て席につく。雑談している者は少ない。

和彦「受けるよ」

大沢「何処？」

和彦「慶応と早稲田」

大沢「きめてるじゃない。慶応は経済かよ？」

和彦「うん」

大沢「あそこ試験早いだろ？ 国立と両天秤かけると、入学金払い込んでバアにしなきゃなんないぞ」

和彦「もう行った方がいいよ」

大沢「大丈夫だよ。まだ、十二分あるよ」

和彦「俺、ちょっと見ときたいんだよ（とノートをめくる）」

大沢「（その和彦を叩き）ガリ勉になったなあ、お前も（と笑いながら立つ）」

和彦「仕方なく苦笑」

大沢「（またかがんで）いいかよ」

和彦「うん？」

大沢「いうなっていわれてたけどよ」

和彦「うん？」

大沢「一昨日、宮本がよ、学校出たところで、お前のこと聞かれたと」

和彦「誰に？」

大沢「あんた三年生？ っていうんだとよ」

和彦「誰が？」

大沢「望月和彦って子知ってるって」

和彦「だから、誰が？」

大沢「すげえいい女だとよ。気をつけろよ、お前（と和彦を叩いて行く）」

和彦「その手にのるか」

大沢「ほんとだって（とちょっと戻って来る。スピーカーからチャイム）」

和彦「いいよ。行けよ。頭、まともんねえだろ（大沢を押し、自分の頭を両側から叩く）」

スピーカーの女性の声「テスト開始十分前です」

●廊下

テスト用紙を持って来る試験官たち、走って教室へ入る生徒。大沢、出て来て、別の教室へ。

スピーカーの女性の声「十分前です。受験生は、着席して下さい」

廊下に緊張した空気流れる間あって、脈やかな次のシン音の音。

●ハンバーガースタンド（昼）

受験生で溢れている。女の子の売り子が待ちかまえている大沢に、「お待たせしました。ツーハンバーガーにホットミルク三百六十円いただきます」

大沢「（もうカウンターに金を置いていて）はい、丁度ね」

●ビルとビルの中の狭い道

和彦、カバンとハンバーガーとジュースを持って逃げるように行く。

●ハンバーガースタンドの前

大沢「（手にハンバーガーとホットミルクを持って、さがつ目で）あれ、何処だ？ あいつ」

●あるビルの前

昼休みらしいサラリーマンが二人ほど通る。ビル入口が数段の石段になっていて、その石段に腰をかけてジュースをのみ、ハンバーガーをかじりながら参考書を見ている和彦。

自動車が行って行く。歩道のある道である。反対側の

歩道に、ひとりの女が立つ。

勤め人たちの、まばらな通行がある。

女、和彦を見ている。新村明美である。

和彦、気がつかない。

明美、見ている。

和彦、ふと視線を感じ、何気なく顔をあげ、ドキリとする。

女が、こつちを見ている。美しい。

しかし、知らない女である。目を伏せ、口をうごかし、本を見る。

女が、ゆっくり、あまり広くない車道を渡って来る。

和彦、視野の外にそれを感じると顔が上げられないまま、動きが止まってしまふ。

明美、歩道へ上り、和彦の方へ来る。

和彦、ハンバーガーをかじる。明美、ゆっくり来て立ち止る。

和彦、目を本に落したまま口を動かしている。

明美、和彦を見ている。

和彦「（無視する方が不自然で、ためらいつつ顔を上げる）」

明美「（まっすぐ和彦を見ている）」

和彦「——」

明美「——」

和彦「ほくに——」

明美「——」

和彦「なにか？」

明美「(はじめて微笑して、目を伏せ) そうなの(と近づいて来る)」

和彦「なんででしょうか？」

明美「バイトする気ない？」

和彦「バイトって——」

明美「二時間六百円出すわ」

和彦「駄目です。ぼく、じき大学の受験で、いま、暇ないんです」

明美「今日だけよ」

和彦「今日だけって——いま、あの、その予備校で日曜テスト受けてるんです」

明美「終るの何時？」

和彦「あと一課目だけど、でも、バイトは駄目です。そういうの、ちょっと余裕なくて」

明美「二時半には終る？」

和彦「あ、でも、バイトなら、そういうの紹介するところあるんじゃないんですか？」

明美「君が、いいの」

和彦「いいって——」

明美「この辺来ると、男の子いっぱいいるでしょう。見て

歩いてたの」

和彦「モデルなんかですか？」

明美「モデル？」

和彦「いえ、ちょっと、その」

明美「自信あるのねえ」

和彦「そうじゃないです。ただどんなその、バイトかな、と思って」

明美「なんだと思う？」

和彦「さあ」

明美「往復入れて、四時間でいいわ。三時半、四時半、五時半、六時半(とかぞえる)」

和彦「でも俺悪いけど、ちょっと(カバンを持ち)試験前に見ときたいところあるんで(立ち上る)」

明美「いや？(落着いている)」

和彦「すいません(と一礼して道へおり) すいません(と予備校の方へ走る)」

明美「(深追いせず見送る)」

試験官の声「はい、あと十五分」

●試験場

腕時計を見ながら、通路を行く初老の試験官。

一心に、鉛筆を走らせている和彦。

電車の走行音、先行して。